

### I-A-13 てんかん波を有する熱性けいれんと大発作てんかんの臨床、脳波上の比較検討

横浜市立大学医学部小児科学教室

木村清次, 本多一恵, 三宅捷太

**目的:** 脳波異常を有する熱性けいれんの位置づけに関して現在種々の論があり一定しない。今回、我々はてんかん波を有する熱性けいれんと大発作てんかんの臨床、脳波上の異同を知る目的で両者を比較検討した。

**対象および方法:** 横浜市立大学医学部小児科を初診し、昭和55年12月現在で3年以上経過を観察し、精神運動発達が正常で大発作のみを示した例の中で、38℃以上の発熱時のみしか大発作をおこさないが脳波異常のみられた例(A群)、熱性けいれんで発症した大発作てんかん例(B群)、無熱性けいれんで発症した大発作てんかん例(C群)の3群にわけ臨床、脳波上の差を検討した。A群は32例で、調査時現在の平均年齢11歳、平均観察期間6年、B群は36例で平均年齢14歳、平均観察期間9年、C群は64例で平均年齢14歳、平均観察期間7年である。

**結果:** 性別では男が多く、女に比しA群で1.9倍、B群で1.2倍、C群で1.3倍であった。発症年齢ピークはA群、B群で2歳台、C群では1歳未満、7歳台の2峰性を示した。2親等以内のけいれんの家族歴はA群で34%、B群、C群では各々14%であった。

抗けいれん剤開始後再発のない例はA群で69%、B群、C群では各々44%、49%であった。初診時のてんかん性脳波異常検出率はA、B、C群で各々75%、86%、81%で、最終検索時では56%、47%、42%であり、A群ではけいれん再発率が少ないにもかかわらず、脳波異常の改善率は他群に比し悪い傾向を示した。

**結論:** てんかん波を有する熱性けいれんは性別、家族歴で大発作てんかん群と異なり、又、てんかん波ではびまん性のものが焦点性より多かった。抗けいれん剤に対する反応は大発作てんかん群より良いか、逆に脳波異常改善率は大発作てんかん群より悪い傾向を示した。

### I-A-14 熱性痙攣児の予後

東京女子医科大学小児科, 横浜市民病院小児科\*

竹重 博子, 福山 幸夫

香川 和子\*

**【目的】** 熱性痙攣患児(以下FC)を追跡調査し、その予後を検討した。

**【対象】** 第1群 1976年の1年間に当科を初診した3063名中、FCの既往のある者、或いはFCを主訴として来院した者305名のうち1981年3月末日における状態を確認しえた242名。第2群 1967年6月から1974年3月までに当科をFCを主訴として来院し、受診前に無熱性痙攣の既往のない307名中、1981年3月末日における状態を確認できた260名。

**【方法】** 対象者にアンケート用紙を送り、家族歴・現病歴を質問し、返信の有無にかかわらず電話で1981年3月末日現在における患児の状態を確認した。可能な者には外来を受信させ、脳波検査を施行した。対象は、経過中1回でもてんかん波が見出された者をてんかん性FC(E群)とし、それ以外の者は福山の分類により単純型(S群)、複合型(C群)に分けた。原則として半年毎に脳波検査を施行した。

**【結果】** 第1群: E群92例, S群74例, C群76例で、E群が38%と多かった。最終観察時平均年齢はE群9歳4カ月, S群8歳7カ月, C群7歳11カ月。無熱性痙攣の認められたのは、E群47例, S群2例, C群9例で、圧倒的にE群が多かったが、S群・C群にも少数認められた。E群の47例中10例は抗痙攣剤を服用していたが、無熱性痙攣を生じた。又、S群、C群の例は抗痙攣剤は服用していなかった。てんかん波の出現年齢は2~6歳にピークがあり、85%は初回発作から5年以内に認められた。てんかん波出現の1カ月以上前から抗痙攣剤を服用していたのは7例であった。

第2群: 最終観察時年齢はE群12歳0カ月, S群14歳5カ月, C群12歳1カ月。無熱性痙攣のみられたのは7例で、E群のみに認められた。